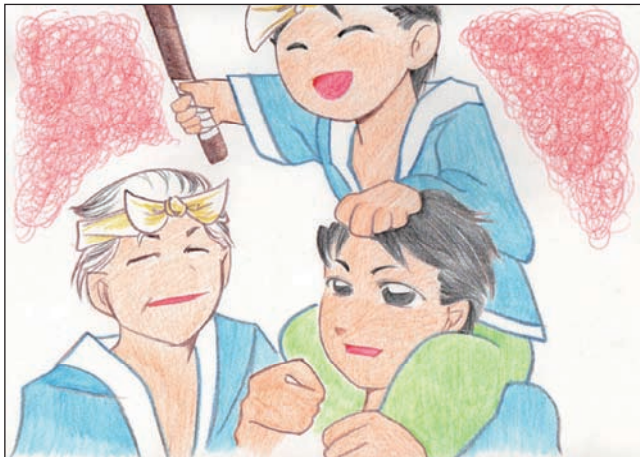


太^{たいち}一とおはやし



登場人物

ナレーター

太^{たいち}一

父^{ちち}

母^{はは}

じい



1



2



3



4



5



6



7



8



ナレーター
仕事しごとに漁りょうに、もくもくとはたりますのじゃ… 今日がせいいつ
ぱいのぜいたく日びですのじゃ… どうぞ、わたくしだけをおなわに」
どうぞ、と名主は両手りょうてをさし出すのでした。

大空に舞う大凧、みあげる人々のどよめき、だいかんせい…

だいかんは目をとじ、しばらくしてしずかに言いました。

「なにか 歓声かんせいといつかさわぎ声こゑが聞こえぬでもないが… また、
よろこぶかおが見えぬでもない。しかし、凧などどこにも見えぬ…」

ナレーター
そして、しかと目をあげ、顔かおをあげると

「いさましく雄雄おおしく大空にまう… なんとみごとな！ 凧など…
どこにもみあたらん。これっ名主」

なぬし
「へへえ」

だいかん
「なるべく しずかに… な」

ナレーター
だいかんは馬の首をかえして、なにごともなかったようにたち去さ
っていくのでした。



ナレーター

夕焼けが公園を染め始め、子供たちが、さよならを言つて、帰っていきます。太一も友達と別れて、家へ向かいました。

ふと、太一の耳にテケテンツクツクテンツクツ、と太鼓の音が聞こえてきました。

太一 「なにしてるのかな。」

ナレーター 太一は音のする方に足を急がせ、のぞいて見ました。そこではお兄さん、お姉さんがおはやしの稽古をしていました。テケテンツクツクテンツクツ：その音に体が動いて楽しくなり、夢中で見ていました。

太一 「いけない、早く帰らないと。」

ナレーター 太一は、急いで帰りました。

太一 「ただいま。」

母 「お帰り、遅かったわね、何をしてたの？」

太一 「お母さん、お母さんぼく、太鼓やりたい、やりたいよ。」

母 「いきなりどうしたの。」



太一

「公園の近くの公民館で、お兄ちゃん達が、太鼓をたたくのを教えてもらってたよ。」

ナレーター

じい

お母さんの袖をつかんで頼んでみると、おじいさんがそれを聞き、

「太一それは、おはやしのことだな。」

ナレーター

じい

おじいさんは、懐かしい昔を思い出すように、話しはじめました。

「わしが、おはやしをやっていたころは、まだ子供ばやしは、なくてな……。昔は、一五、六歳のものが青年会に入会と同時に、参加したもんだあ。」

太一

「ふくん。」

じい

「おはやしはな、太鼓だけじゃないんだ。」

太一

「他に何を使うの？」

じい

「太鼓もなー、大太鼓・小太鼓それに、笛・すり鉦・拍子木とか。」

太一

「いっぱい使うんだね。」

じい

「おお、わしは、大太鼓をやってたんだぞ。」

ナレーター

おじいさんは、自慢そうに、タバコをふかすのでした。

太一

「へえ、すごいんだね。」



じい 「太鼓の音が、聞こえると、血がさわいでな。」

太一 「僕もわくわくするよ。それと一緒に？」

じい 「おう、そんなもんだ。」

太一 「それからどうだったの、教えて。」

ナレーター と太一は、せがむのでした。

じい 「そうだなあ、入谷の天王様にはな。」

ナレーター 入谷の天王様とは、鈴鹿明神社のお祭りのことです。

じい 「神輿もな、血の気のおおい者かもみあってかつぎ、棒で、体をこ

すって、汗がとびちったもんだ。」

太一 「へえ、お神輿もすごかったんだね。」

じい 「そりやそうさ、ヨイサ、ヨイヤサと掛け合っつてな、わし達 おは

やしもまけちゃいられないと、熱くなり太鼓をたたく手にも力が入ったもんだ。」

ナレーター と思ひ出しながらいつになく勢いよく話をしたのでした。

じい 「荒れに荒れるので観衆は大喜びだったなあ。」

太一 「お祭りもすごかったんだねえ。」



じい 「そうよ：：そう云えば、わしのじいさまから昔の話しでこんなこと

も聞いたなあー。」

太一 「なになに？聞きたい、聞きたい。」

ナレーター 太一は身を乗り出して言うのでした。

じい 「昔は、太一が、見てきた、撥さばきの、ゆっくりなものだけだったのだが、ある部落が、賑やかな新囃子をしようとしたら猛反対にあつてな。」

ナレーター 江戸のころは、ゆっくりな下町囃子がほとんどでした。明治に入り賑やかな新囃子をする、調子がくるい、また一つだけが浮きあがるので、反対されたのです。今は、地域によって下町囃子や新囃子で行われています。

じい 「いつだったか、五つの部落の者が集まって、相談したことがあつたそうだ。」

ナレーター 昔は、座間・入谷・栗原・新田宿・四谷でおはやしが盛んでしたので、その五つの部落で話し合いをしました。

太一 「それでどうなったの？」



じい 「話はなかなかまとまらなかつたんでな、血の気の多い若者があば

れそうになつたんだと。」

太一 「こわいねえ。」

じい 「もし部落の者が交渉こうしやうに負けて出てきたなら、ただじゃおかねえと

待ち構かまえてたんだ。」

ナレーター しかし交渉に勝つたとわかると、若者たちは、消えてしまえばくすると、

じい 「どこから買って来たか、役員やくいんの前に酒を出してな、みんなでお祝いをしたそうだ。」

太一 「よかつたね。」

じい 「そうだ。祭りが好きな者たちだ。話し合いで仲良くなつたとき。」

ナレーター そんな昔話むかしはなしをしていると太一のお父さんが帰ってきて、着替きがえ

をしながら、その話しを襖越ふすまこしに聞いて二人のいる居間いまに入ってきました。

太一 「あつ、お父さん、お帰りなさい。」

じい

「お帰り。」

父

「ただいま。子供ばやしか、懐かしいな。父さんもやったぞ、テケテンツクツクテンツクツ：神輿は今ほドッコイドッコイドッコイソーリヤーと祭りは、あつくなくなったな。思い出したら祭りが、待ちどうしいな、ワクワクしてくるよ。」

ナレーター

お祭りはおはやしや神輿の掛け声が聞こえてくるとワクワクドキドキ楽しくなります。ちなみに、神輿の掛け声は、いつのころからか、ヨイサ・ヨイヤサから、ドッコイドッコイドッコイソーリヤーと変わり、助つ^{すけ}人の担ぎ手^とも来て威勢^{いせい}がいいので、おはやしにも力が入り祭りも賑やかにあります。

太一

「それで、それで、もつときかせて。」

父

「そうそう、近所の人や親戚^{しんせき}の人にほめられて、おひねりをもらったこともあったな。」

太一

「おひねりつてなあに？」

父

「紙に包んでひねった物をおひねりと言って、神様^{かみさま}にお供え^{そな}したり、子供達に祝儀としてあげたり・・・今だと・・・ごほうびだな。」



「そうそう飴玉の時もあつたよ。」

「懐かしそうに思い出しながら話は弾みます。はず」

太一 「楽しそう：・僕おはやしやりたい。」

じい 「そうか、やるか。」

父 「ようし明日行あしたつてみるか。」

母 「なんか楽しそうね、私もいれてよ。」

ナレーター 「食しょくじ事を作り終おえたお母さんが入ってきました。」

太一 「僕、おはやしやるよ。明日お父さんが連れていってくれるんだー。」

母 「よかったわね太一、おじいさんやお父さんとおんなじお囃子をするのね。」

ナレーター 「太一は胸をワクワクさせ、太鼓を叩く真似をしていると、おじいさんがうれしそうに、」

じい 「おはやし親子三代かあ：・うれしいね。」

ナレーター 「素敵すてきな、おはやし親子三代が、生まれそうです。」

座間では、今も地域に根付いたおはやしがあり、それぞれの地域に伝わっているお祭りには、ちようちんや紅白の幕で飾り立てた車の上で子供達が、おはやしをして地域ちいきをまわるのです。